

初年次教育の現状と課題

A 大学社会福祉学科一年次アンケートから

原田 奈津子¹⁾, 石倉 健二³⁾, 高島 恭子¹⁾
山岸 利次¹⁾, 熊谷 賢哉²⁾, 井上 美代子¹⁾

(¹⁾長崎国際大学 人間社会学部 社会福祉学科
²⁾長崎国際大学 人間社会学部 国際観光学科
³⁾兵庫教育大学 大学院 学校教育研究科)

要 旨

日本の大学においても、初年次教育が教育課題の一つとして自覚されるようになってきた。私たちは本学における初年次教育のあり方を模索するために、学生の大学生活への適応を支援するための基礎的知見を獲得することを目的として、人間社会学部社会福祉学科一年次生を対象に、大学生活への適応を把握することを目的としたアンケートを実施した。アンケートの結果、大学生活への適応に関しては、4月から7月の最初の三ヶ月間における変化が非常に顕著であり、この期間、学生をいかに支援していくかが初年次教育において重要であるということが示唆された。

キーワード

初年次教育、大学生活、適応

1. はじめに

周知のように、高等教育研究者のM・トロウは、高等教育への進学率に関連させながら、高等教育の発展段階を「エリート段階」、「マス段階」、「ユニバーサル段階」に区分した¹⁾。トロウによれば、ユニバーサル段階は高等教育への進学率はおおよそ5割を超えるものであるが、この段階での高等教育機関(大学)は以下のように特徴付けられる。第一に、高等教育の機会が「万人の義務」であること[「マス段階では「相対的多数者の権利」、以下同様]、第二に、大学進学要件が「開放的(個人の選択意志)」であるということ[「準制約的(一定の制度化された資格)」、第三に、高等教育の目的が「新しい広い経験の提供」であること[「知識・技能の伝達」、最後に、高等教育の主要機能が「産業社会に適応しうる全国民の育成」であること[「専門分化したエリート養成+社会の指導者層の育成」、]である。このように、高等教育への

進学率の上昇は高等教育の質的変容を必然的に伴うのであるが、日本の高等教育は、ユニバーサル段階を迎えているといえる(表 - 1)。

先進諸国においていち早く「ユニバーサル段階」を迎えたのがアメリカ合衆国であった。そして、かの地での大学はこれに対応するために初年次教育(First Year Experience)というプログラムを実践している。初年次教育プログラムの歴史自体は、19世紀末にまで遡ることができ、その歴史を一括りに論じることはできないが、近年のアメリカにおける初年次教育プログラムのあり方は、1960年代以降の高等教育への進学率の上昇への対応策としての性格が極めて強い。すなわち、進学率の上昇により多様な学生が大学に入学するようになり、そのような従来とは異なる学生に対してそれまでにはなかったプログラムを行う必要が生じたのである。こうした初年次教育プログラムの性格は調査結果からもうかがい知ることができる。2003

表 - 1

	エリート型	マス型	ユニバーサル型
全体規模	15%まで	15%～50%まで	50%以上
高等教育の機会	少数者の特権	相対的多数者の権利	万人の義務
大学進学要件	制約的(家柄や才能)	準制約的(一定の制度化された資格)	開放的(個人の選択意志)
高等教育の機会目的観	人間形成・社会化	知識・技能の伝達	新しい広い経験の提供
高等教育の主要機能	エリート・支配階級の精神や性格の形成	専門分化したエリート養成 + 社会の指導者の育成	産業社会に適応しうる全国民の育成

年に行われた調査では、初年次セミナーの目的は「アカデミック・スキルズの開発」、「キャンパス資源やサービスのオリエンテーションの提供」、「自己分析/人格の発達」が多くあげられた。また、初年次セミナーの内容を構成する最も重要なものとして「スタディ・スキルズ」、「キャンパス資源」、「時間管理」、「アカデミック・プランニング/アドバイシング」、「クリティカル・シンキング」があげられた。また、セミナーの位置づけに関しては、初年次セミナーを単位として認定している大学が参加大学の9割を超え、さらに、約半数の大学がそれを初年次生の必修としていたのである。

こうしたアメリカの動向は日本にとっても決して無縁ではない。上記のように「ユニバーサル段階」を迎えた日本においても、高等教育の質的変容に教育面においてどのように対処するかということに対応すべき喫緊の課題である。実際、2001年に全国の私立大学の学部長に行った調査によれば(対象:1,170学部の学部長うち、636学部からの回答) 実に8割以上の大学が「導入教育」を実施しているのである(「予定」、「検討中」を含めれば9割を超える)。なお、「導入教育」の内容は、「スチューデント・ソーシャルスキル」、「学習スキル」、「情報資源活用スキル」、「教科補習」にわけられる。アメリカにしても日本にしても、このようなプログラムの眼目は、大学(生活)への適応を促進させていく

ことにあるといえるのである。

今後、初年次教育の重要性は増大することはあっても、決してその意義がなくなるということはありません。特に、以下2つの出来事は日本における「初年次教育」の常識化とも言うべき動向を端的に著している。一つ目が「初年次教育学会」の設立である。従来、高等教育に関しては「高等教育学会」、「大学教育学会」、「日本リメディアル教育学会」等が学会レベルでの議論を行い、また、高等教育研究を牽引してきたが、本年、名称のごとく「初年次教育」に特化した学会が設立された。学会の発足が学問の制度化を意味するのであれば、これは非常に大きな出来事であるだろう。二つ目が中教審の答申に初年次教育が取り組むべき課題として提示されたことである。学会の設立にあたかも対応するかのよう、中教審大学分科会の答申(案)「学士課程教育の構築に向けて」(平成20年10月29日)では、「初年次における教育上の配慮」という項目が設定されたのだ。もはや中教審にとっても、初年次教育は大学教育(学士課程教育)において取り組むべき課題として認知されたのである。

私たち人間社会学部社会福祉学科初年次教育研究会は以上のような動向を視野にいれながら、本学科に求められる初年次教育のあり方を一昨年から学科共同研究費の援助を受けながら検討してきた。研究活動の上で、昨年重点的に

取り組んだのが、以下に提示する一年次アンケートの実施およびその分析である。本調査は、日本において早くから初年次教育の重要性を提唱し、かつ現在もなお日本におけるそれに関する議論を牽引している研究者たちによってなされた調査ⁱⁱに範をとり、一年次の学生の諸動向およびニーズを把握するために行われた。その中でも濱名・山田ら（2004）の「ユニバーサル高等教育における導入教育と学習支援に関する研究」は、大学新生の大学教育への移行と適応のための支援に関して、科学研究費補助金を用いて5大学において調査を行ない、まとめられたものである。（初年次教育の中核的要素を基礎学力の補足と学習技術・学習習慣の習得の面からの高校から大学への移行と、動機付けや計画的ななさなどのいわば「意欲格差」への指摘から学習支援が論じられている。）

この濱名らの調査票を基に、学生の大学生活への適応を支援するための基礎的知見を得ることを目的として、昨年度A大学社会福祉学科1年次生を対象にアンケート調査を行った。

2. 方法

調査の対象

A大学社会福祉学科2007年度1年生の58名を対象とした。

調査の時期

2007年の4月（入学直後、フレッシュマンキャンプ前）・7月（前期試験前）・10月（夏休み後）・1月（冬休み後、後期試験前）の4回

調査の方法

1年生の必修科目である「教養セミナー」の時間に、担当教員を通じて調査の目的や回答方法について説明を行い配布し、即時あるいは1週間以内に回収を行った。

回答用紙には学籍番号の記入を求め、各回での個人の回答の対応が取れるようにしたが、入力には教養セミナー担当教員以外の人によって行

われ、入力後のデータは学籍番号とは異なる整理番号を用いることにより、一連のデータと個人との特定ができないよう配慮した。

調査の内容

調査票は、大学1年生の大学への適応に関わる先行研究の中から調査項目を取りだし、さらにA大学社会福祉学科として必要と考えられる項目を加え編集して作成された。調査内容は、学習の適応状態、対人関係上の適応状態、生活全般の適応状態、及び、父母の学歴、学内外の諸活動への参加状況、大学生生活についての実感、福祉を学ぶきっかけ、将来についての考え、高校（大学入学前）での学習や生活の状況、大学での今の様子、自分自身についての考え、大学での勉強、大学での勉強習慣、大学での学生生活面の総計108項目（4月）となった。ただし、4月のみ行った項目（ 、 ）や時期に合わせての項目（試験の準備の仕方など）など、回数ごとに若干の増減がある。

回収率

4月調査 配布51名（配布率87.9%）回収51名（回収率100.0%）

7月調査 配布51名（配布率87.9%）回収50名（回収率98.0%）

10月調査 配布42名（配布率72.4%）回収42名（回収率100.0%）

1月調査 配布48名（配布率82.8%）回収48名（回収率100.0%）

4月時点で7名が欠落し、夏休み明けの10月にさらに9名が欠落してしまった。

濱名らの調査とは、調査の時期、規模、地域性などが異なり、比較は厳密にはできないと考えられるが、濱名らの調査報告ⁱⁱⁱの結果と対比をしながら、以下、A大学社会福祉学科生の大学生活への適応を見ていく。

3. 結果および考察

(1) 入学後の学習にかかわる経験

濱名らは、「インターネット利用経験の急増」、「授業後の友人との授業についての話」、「友人と一緒に勉強」の増加、遅刻やさぼりの増加などが入学後2か月で出現していることから「最初の2か月で学習に適応するものと、そうでない者の分化が進む」としている（表 - 1）。

A大学社会福祉学科1年生の結果は表の通りであった（表 - 2）。なお、数値は濱名らに倣い、「そうである」、「どちらかといえばそうである」を合算しパーセントで示している。A大学社会福祉学科1年生においても4月と7月と

の間で変化が多く、最初の2～3か月が学習への適応を支援する上で重要な時期であることが考えられる。

(2) 入学後の悩み

次に入学後の悩みについてみてみたい。濱名は、入学後の悩みのトップが「高校時代の友人に会いたくなる」であり、また過半数の学生が入学直後に感じた悩みとして「授業が難しい」、「授業が退屈だ」、「さびしい」であること（表 - 3）から、移行期の悩みとしては“人間関係”と“授業への適応”が双壁であるとしている。これは10月になると「授業が難しい」が減少し半数以下になること、「授業を聞いて新しい考え

表 - 1 入学後の学習にかかわる経験（濱名ら、2003調査）

	4月	6月	10月	10月 - 4月
授業中、内容について友達と話をした	49.2%	< 62.1%	< 79.8%	30.6%
相談事のできる相手を探した	42.1	46.2	47.8	5.7
宿題をあまり一生懸命しなかった	29.4	< 40.9	40.7	11.3
友達と一緒に勉強した	24.0	< 47.9	52.1	28.1
授業に遅刻した	22.2	< 50.6	46.2	24.0
授業中、自分から進んで発表した	19.0	< 34.7	32.3	13.3
授業をさぼった	16.6	< 43.4	40.0	23.4
課題やレポートのためにインターネットを利用した	15.2	< 72.9	< 79.8	64.6
個別に指導を受けた	7.2	10.2	13.1	5.9

表 - 2 入学後の学習にかかわる経験（上位から）（A大学、2007調査）

	4月	7月	10月	1月
授業の後、授業の内容について友達とよく話をする	46.9%	44.9%	46.3%	47.9%
悩みごとの相談のできる相手を探している	38.8	39.6	> 24.4	37.5
授業の予習や復習、課題のためにインターネットを利用する	14.0	< 23.4	19.5	< 29.2
授業中、自分から進んで発言する	16.0	14.6	19.0	20.8
友達とよく一緒に勉強する	10.2	< 14.6	< 29.3	29.2
授業によく遅刻する	0.0	< 20.4	24.4	< 37.5
授業をよくさぼる	0.0	< 20.4	22.0	< 27.7

方ができる」が増加することから、「10月になると学習に適応するものもでてくるのである。「授業への適応」についての悩みは、入学後半年で解消する方向に向かい始める」と考察している。一方で「人間関係」の悩みは入学後半年経っても悩みが解消する方向には向かっておらず、日本の大学生の「移行」期における最大の悩み

は「人間関係」にあるとしている。

これに対し、今回の調査の結果は表の通りであった。(表 - 4)。A大学社会福祉学科1年生では「高校の友人に会いたい」が年間を通して高い。が、「人間関係」の悩みとして濱名が指摘する「さびしい」「友人がいないことや少ないことで困った」は4月が有意に高く、7月に

表 - 3 入学後の悩み (濱名ら、2003調査)

	4月	6月	10月	10月 - 4月
高校の友だちに会いたくなる	75.2%	72.5%	68.9%	- 6.3%
授業が難しい	58.2	59.5	>41.4	- 16.8
授業が退屈だ	55.6	<69.3	>60.3	4.7
さびしい	50.3	54.0	51.2	0.9
経済的に許せば下宿したい	38.8	44.3	44.9	6.1
授業を聞いて新しい考え方ができるようになった	37.2	46.8	50.7	13.5
健康状態が不安だ	35.3	43.6	40.1	4.8
大学の中で孤立している	32.2	33.3	29.5	- 2.7
入学後の知り合いとうまくやっていく自信がない	31.8	34.3	31.3	- 0.8
学内では一人ぼっちである	17.0	18.0	17.5	0.5
アルバイトが忙しくて勉強できない	14.2	23.5	24.5	10.3
友達づきあいが忙しくて勉強できない	13.7	17.6	17.9	4.2
家の手伝いが忙しくて勉強できない	6.3	11.2	9.4	3.1

表 - 4 入学後の悩み (A大学、2007調査)

	4月	7月	10月	1月
高校の友人に会いたい	90%	87.8%	85.7%	91.7%
授業が難しい	80.4	87.8	83.3	89.6
授業が退屈だ	76.0	81.6	88.1	85.4
さびしい	52.0	>38.8	35.0	39.6
授業を聞いて新しい考え方ができるようになった	47.1	<55.1	59.5	<72.9
友人がいないことや少ないことで困った	36.0	>20.4	26.2	25.0
健康状態に不安を感じる	29.4	<40.8	46.3	45.8
入学後の知り合いと上手くやっていく自信がない	26.0	22.4	28.6	25.0
アルバイトが忙しくて勉強できない	13.0	<27.1	21.4	<39.6
友達づきあいが忙しくて勉強できない	6.0	10.2	9.5	14.6
家の手伝いが忙しくて勉強できない	0.0	0.0	0.0	<10.4

減少している。これは調査がフレッシュマンキャンプ前の入学後ごく早い時期に行われたためである可能性が考えられる。もう一方の悩みとして指摘された“授業への適応”については、「授業が難しい」には変化がほとんど見られない。しかし「授業を聞いて新しい考え方ができるようになった」は、4月では47.1%であったものが、1月になると72.9%と半数をはるかに超える。相変わらず「授業は難しい」と感じられているものの、多くの学生は「授業を聞いて新しい考え方ができるようになった」と自己評価し、大学での学業のスタイルを得ているものと考えられる。その他、濱名らが調査を行わなかった1月に、アルバイトや家の手伝いが忙しくて勉強できない学生が増加するなどの変化がみられる。

(3) 自分で自信を持っていること

新入生たちの自信について濱名は、一般的に、自分に対する自己肯定感は必ずしも高いとは言えないとしている。また、全体的な傾向に

大きな変化が出てこないことから、移行は短期のオリエンテーションや学習技術教育だけでは十分とは言えないことが示唆されているとみている(表 - 5)。

これに対し、A大学社会福祉学科1年生での調査の結果は表の通りであった(表 - 6)。A大学社会福祉学科1年生でも変化は大きくは表れない。しかし、「人付き合いや対人関係をうまくやることについての自信」が4月に低くなっている。また、「自分の意見を人に分かりやすく説明する」ことの自信は4月が高い。

(4) 大学生活についての適応度

調査の形態は異なるが、濱名は大学生活の適応度について、対人関係と生活全般については6～7割の学生がうまくいっていると答えその後の変化も小さいとしている。またこれに比べ学習については、6月頃から適応 - 不適応の分化が始まり、10月になると不適応が減少し、過半数の新入生が「うまくいっている」と感じるようになるとしている。A大学社会福祉学科1

表 - 5 自分で自信をもっていること(濱名ら、2003調査)

「自信あり」上位	4月	6月	10月
1. 人付き合いや対人関係	50.6%	53.2%	52.6%
2. 努力すること	50.3	47.2	52.2
3. 自己理解	46.2	51.9	51.6
4. 体力	44.2	46.0	46.7
5. 自分は「やればできる」という自信	43.8	43.4	< 49.8
6. 大学の講義の理解力	36.4	34.5	< 44.7
7. いつも冷静でいること	36.4	41.7	42.4

「自信あり」下位	4月	6月	10月
1. 数学的思考	15.3	20.1	20.2
2. プレゼンテーション能力	17.2	17.6	21.5
3. 文章作成能力	19.8	< 27.5	26.4
4. リーダーシップ	21.4	21.6	21.9
5. 知性	22.7	24.2	24.3
6. 高校までの勉強	23.8	< 30.9	31.1

年生では学習面での適応に変化が表れるのは1月であり、「うまくいっている」と自己評価するのはは慎重である(表 - 7)

平均の差の検定でも、4月と7月の変化が大きいことが見てとれる。

これらを先の分類にあわせると次のようになる。

(5) 平均値の差による検定

A 大学での学生における特徴をさらに知るために、4月、7月、10月、1月について、各項目の「そうである」「よく感じる」「かなりある」を1点、「どちらかといえばそうである」「時々感じる」「どちらかといえばある」を2点、「どちらかといえばそうではない」「あまり感じない」「どちらかといえばない」を3点、「そうではない」「全く感じない」「あまりない」を4点として、各月各項目ごとの平均の差の検定を行った。有意な差が見られたのは以下の15項目である(表 - 8)。

- 入学後の学習にかかわる経験
- ・授業の予習や復習、課題のためにインターネットを利用している
 - ・友達とよく一緒に勉強する
 - ・授業によく遅刻する
 - ・授業をよくさぼる
- 入学後の悩み
- ・「友達づきあいが忙しくて勉強ができない」と感じる
 - ・「家の手伝いが忙しくて勉強ができない」と感じる

表 - 6 自分で自信をもっていること (A 大学、2007 調査)

	4月	7月	10月	1月
自分自身の性格や特徴について理解している自信	74.0%	79.6%	78.6%	75.0%
自分は「やればできる」という自信	72.0	77.6	73.8	68.8
ものごとに対して粘り強く取り組むことができる	66.0	64.6	56.1	54.2
高校時代(大学入学前)の学習は順調に進んでいた	60.0			
情緒面での安定度についての自信	57.1	44.9	45.2	48.9
人付き合いや対人関係をうまくやることについての自信	54.0	< 69.4	61.9	68.8
物事を順序立てて理論的に考えることについての自信	51.0	40.8	35.7	44.7
大学の講義を理解することについての自信	50.0	34.7	45.2	48.9
自分の意見を人に分かりやすく説明することができる	40.0	> 27.1	29.3	22.9
コンピューターを利用する能力についての自信	25.5	29.2	28.6	37.5
作文能力についての自信	24.0	22.4	16.7	18.8
みんなのリーダーシップをとることについての自信	20.0	29.2	23.8	29.2
学力についての自信	10.0	10.4	19.0	20.8

表 - 7 大学生活についての適応度 (A 大学、2007 調査)

	4月	7月	10月	1月
学習面	38.0%	34.7%	45.0%	< 53.3%
対人関係	56.0	67.3	67.5	69.6
生活全般	56.9	57.1	55.0	65.2

表 - 8 平均値の差 (A大学、2007調査)

設問	統計結果		良
B	学内の何らかのサークル・部活に加入している	4月 > 7月、10月、1月	
C	何らかのアルバイトをしている	4月 > 7月、10月、1月、7月 > 1月	
H-a	履修する科目の選び方で困ったと感じる	4月 < 10月、1月	大
H-b	履修登録の仕方がわからず困ったと感じる	4月 < 10月、7月 < 10月	大
H-c	授業が長くて困ったと感じる	4月 < 1月 (p=0.099)	大
H-e	「アルバイトが忙しくて勉強できない」と感じる	4月 > 1月 (p=0.051)	大
H-f	「友達づきあいが忙しくて勉強ができない」と感じる	4月 > 10月、1月	大
H-g	「家の手伝いが忙しくて勉強ができない」と感じる	4月 > 10月、1月、7月 > 10月、1月	大
H-l	板書されたことをノートに書くようにしている	4月、7月 < 1月	小
H-n	授業中に携帯メールをよくしている	4月 > 7月、10月、1月	大
H-r	授業の予習や復習、課題のためにインターネットを利用している	4月 > 10月、1月、7月 > 1月	小
H-t	図書館の利用方法や文献の調べ方がわかる	4月 > 7月、10月、1月	小
I-a	友達とよく一緒に勉強する	4月 > 10月、1月、7月 > 1月	(小)
I-e	自分の健康についての自信がある	4月 < 1月 (p=0.076)	小
J-b	自分のスケジュールをスケジュール帳や携帯電話などで管理するようにしている	4月 > 1月	小
J-d	授業によく遅刻する	4月 > 7月、10月、1月、7月 > 1月	大
J-e	授業をよくさぼる	4月 > 7月、10月、1月	大
J-g	日頃から図書館を利用している	4月 > 7月、10月、1月、7月 > 1月	小

自分で自信を持っていること なし
 大学生活についての適応度 なし
 その他
 ・学内の何らかのサークル・部活に加入している
 ・何らかのアルバイトをしている
 ・履修する科目の選び方で困ったと感じる
 ・履修登録の仕方がわからず困ったと感じる
 ・板書されたことをノートに書くようにしている
 ・授業中に携帯メールをよくしている
 ・図書館の利用方法や文献の調べ方がわかる
 ・自分のスケジュールをスケジュール帳や携帯電話などで管理するようにしている

・日頃から図書館を利用している
 こうしたことから、次のような大学の初めの一年が浮かぶ。すなわち、大学に入学して、インターネットを利用して予習や復習、課題をするようになり、友達と一緒に勉強するなどの体験をする。サークルや部活、アルバイトを始め、履修登録の仕方や履修科目の選び方には困らなくなる。日頃から図書館を利用するようになり、その利用方法や文献の調べ方が分かるようになる。一方で、遅刻やさぼりのような体験もするようになる。授業中に携帯メールをするようになる。板書されたことをノートに書くことは減ってくる。「友達づきあいや家の手伝いなどで勉強ができない」と感じ、自分のスケジュールをスケジュール帳や携帯電話などで管理するようになる。しかしながら、自分への自

信や大学生活への適応には変化はない。

ただし、今回の調査はサンプル数の少なさ、とりわけ1月に数名欠けたことが結果に影響を及ぼしている可能性がある。また濱名らの調査との比較においても、調査票全体の構成が異なり、項目や選択肢の表現もまったく同じというわけではないことにより、その解釈には注意を払う必要がある。

4. まとめと今後の課題

このような大学最初の一年の変化は、私たちの経験則と離れたものではなく、調査によって確認された一年次学生の動向は教員間で共通理解とすることが一定程度可能であるだろう。また、この変化は、4月から7月の3～4ヶ月間に大きいことも確認された。この時期の「不安でいっぱい」な学生をどのように支援していくかが初年次教育を実践する上での重要な鍵であると考えられる。濱名らの調査に比べたとき、A大学社会福祉学科の学生は、「高校の友人に会いたい」学生の比率が年間を通して高く、さらに、大学への適応については「うまくいっている」と自己評価するには慎重でもあるとの結果が示されている。ここに示されるような学生の心細さに対応する「人との良好な関係作り」についても教育的支援が必要であろう。もっとも、濱名の調査でも、対象とした大学一年生の「自分に対する自己肯定感が必ずしも高いとはいえない」ことは指摘されており、この不安や自信のなさはA大学社会福祉学科に限ったことではないことも示唆される。そもそも青年期は「第二の誕生」とも言われる時期であり、自己のアイデンティティを他者との関わりにおいて確保することが重要な（達成すべき）課題であるが、大学生はこうしたライフサイクルにおける重要な岐路に立たされつつ同時に大学（生）という新しい環境・ライフスタイルに適應することが求められるのである。こうしたことはこれまでも存在したわけだが、大学のユニバーサル化はこの問題を一挙に噴出したとも言えるの

である。初年次教育には、これまでも考えられてきたような「アカデミック・スキルズ」「スチューデント・ソーシャルスキル」「学習スキル」「情報資源活用スキル」のほかに、高等教育へのアクセスが広く可能になったことによって顕在化した上記のような青年期の発達課題への支援という一面があるということができる。

しかし、その一方で初年次教育が以上のような大学への適応にのみ重点をおくのであれば、それは大学教育の一環としては決して十分ではない。冒頭に提示した中教審の答申が述べているように、現在大学教育に求められるのは、ユニバーサル化への対応のみならず、大学卒業にふさわしい「力」「学士力」を学生に教育・付与することである。こうした大学に対する社会的要請からは、本稿におけるこれまでの議論とは逆のベクトルの発想 -、卒業時に身に付けるべき能力から教育プログラムを検討するというもの - を求めるだろう。こうした2つの議論を結び付けることは、さしあたり、初年次教育が大学教育全体においてどのように位置づき、さらに、より高次の教育に接続するのが、換言すれば、「学士課程教育」と「初年次教育」の関係という問題へと収斂すると思われる。事実、冒頭にあげた諸学会の議論は、「初年次教育」の日本への定着という当初の方向性から確実に脱皮しているようである。初年次教育の議論はセカンド・ステージへと移行しているのである。

注

- i マーチン・トロウ（1976）『高学歴社会の大学エリートからマスへ』東京大学出版会。
 - ii 濱名 篤（2004）「日本における初年次教育の課題 大学新入生調査結果より」『ユニバーサル高等教育における導入教育と学習支援に関する研究（平成13～15年度科学研究費補助金基盤研究(B)(1)）』。
- 濱名 篤（2004）『大学生にとっての円滑な移行』『大学教育学会誌』第26巻，第1号。
- 濱名 篤（2005）「新入生の適応と不適応はど

のような経験から生まれるか～学習面と対人関係
を中心に～」『大学教育学会誌』第27巻, 第1号.

山田礼子(1998)「導入教育カリキュラムのた
めの予備調査 新入生の学生文化の実像をさぐる
」『プール学院大学研究紀要』第38号, 143-160.

- iii 濱名 篤(2004)「日本における初年次教育の
課題 大学新入生調査結果より 」『ユニバー
サル高等教育における導入教育と学習支援に関する
研究(平成13～15年度科学研究費補助金基盤研究
(B)(1))』.

調査対象: P大学(所在地:兵庫県, 入試難易
ランク(代ゼミ)42), Q大学(所
在地:大阪府, 入試難易ランク(代
ゼミ)42), R大学(所在地:東京
都, 入試難易ランク(代ゼミ)51)
の3つの大都市近郊の私立文系大学

1年生 約500名

国私立大学(人文社会科学系)の5
つの大学の協力を得て開始された調
査であるが, 期日までに回収できた
3大学のデータを報告書での対象と
している.

有効数: 第1回537, 第2回468, 第3回481

調査時期: 平成15年4月(入学直後), 6月(大
学生活に慣れた時期), 10月(春学期
の成績を受け取る次期)の3回

調査方法: 学生番号により個人を特定して, 3
回分揃った個人別にデータを接合し
て分析の予定. この報告書では接合
前の3大学(いずれも人文・社会科
学系の入試難易度中堅以下の私立大
学)のデータが用いられている.